

8月17～18日（博多駅～室堂）

青木

08：07 博多発  
20：29 京都着  
21：40 京都発  
翌05：00 富山着  
翌08：25 室堂着

朝、博多駅に集合。現役と4年の先輩も見送りにきてくださっていた。嗜好品のカントリーマームを白川から、暇つぶしのクロスワードパズルを中山から、パンを宮本先輩からもらい出発。博多駅から京都までは恒例の18切符で鈍行に乗って向かう。私なんかは大概慣れているので、大丈夫だったのだが、1年生はどうだったのだろうか。

京都に着くと、夜行バスの発車時刻までしばし時間があつたため夕食をとった。これから十日以上はまともな夕食がとれないだろうから、味わって食べる。私はカツ丼を食べた。みんなも丼ものだった。

富山に着くと、中本・古澤先輩の2人は吉野家で、青木・竹下先輩はコンビニで朝食をとった。そして室堂に向かった。

8月18日（室堂ターミナル～劔沢テン場）

青木

09：00 室堂発  
09：35 雷鳥沢テン場  
11：52 劔御前小舎  
12：30 劔沢テン場

室堂から雷鳥沢テン場までは道も舗装されており、たくさんの施設もあつた。どうやら観光地のような。室堂が観光地だとは知らなかったため、少々驚く。

ターミナルの出口で記念撮影をしてもらった。雪渓も残っており、綺麗な場所だった。道中にはみくりが池温泉があり、定着が終わったら入るぞと意気込み歩を進めた。(結局、中本しか入らなかったのだが) 道も歩きやすかったため、フル歩荷でも楽に歩ける。

だが、一方雷鳥沢から劔御前小舎まではずっと登り。登山道に入る前から道が見えるもんだから登る前からげんなりさせられる。進行方向右手には雪渓があり、その上をグリセードで下山しているパーティーがいた。先頭を滑っている人はなかなか上手で、グリセードを本でしか見たことなかった私にはかなり勉強になった。だが、あんな規模の小さい雪渓上でやるものではないだろう。

劔御前小舎に着くと、先ほどまで晴れていたのだが、雲行きが怪しくなる。雷も遠くでなり始めていた。風も吹き少し肌寒かった。そのため休憩もほどほどにし、テン場を休憩無しで一気に目指す。

テン場でにつくと、盆あげだったがかなりテントが張ってあった。社会人の方はもちろん、おそらく大学生であるかというパーティーもいた。早速テン場で受付を済ませる。我々は5日ほどいる予定だったのだが、なんとテン場代は1人1000円。良心的だ。水場は二カ所あり、管理所近くのものには塩素消毒されているとのこと。そこではみなさんがビールやら野菜やらを冷やしていた。ビールやジュースは少し下った、劔沢山荘で購入してきているようだ。劔の方をみると少しガスってはいいたが、前劔がよく見えていた。劔沢のテン場はトイレが汚いと聞いていたが、思ったよりは綺麗で、紙もちゃんとおいてあった。

晩飯はキムチ鍋。高野豆腐がほとんど汁を吸っていったが、なかなかうまい。高野豆腐がとくにうまい。

## ■8月19日(日) 晴れ のち ガス

行程：劔沢CS～別山尾根～劔岳～早月尾根偵察～別山尾根～劔沢CS

報告者：古澤

4:00 起床。朝食はフランスパンと卵スープだった。パンが長期合宿の食事として用意されるのは（私にとっては）初めてのことだ。古澤が持参したジャムをつけ、スープをすすりながら食べるが、フランスパンなので噛むのに少々顎が疲れた。しかし手間がかからず量があり、アレンジの余地があると思うので今後のメニュー改良に期待したい。

身支度を済ませ、5:00 出発。今日の行程に不要な荷物はテントに置いてきたため、足取りは軽快だ。太陽は山に隠れてまだ見えないものの、ライトが必要ないくらいにあたりは明るくなっていた。途中、「今年の雪渓は例年以上に雪が残っている」との情報通り、3年前には渡った覚えのない雪渓のトラバースがあった。ほどなくして、5:21 剣山荘に到着。防寒着を脱ぎ、地図など見つつ休憩をとった。東には鹿島槍と思しきピークがぼんやりと見えていた。

剣山荘から一服劔への道のりから、やや道がガレてきた。落石を起こさぬように、と上級生から中本に指示が飛ぶ。途中、20人前後の中老年パーティーを抜かそうとしたが道が狭く、また脇道は落石を起こしかねないため抜かし切れず、半ば同行者のようになりながら進む。5:56 一服劔到着。山頂では先着した若い男性など数人が休憩していた。

再び大人数のパーティーに前を行かれてはたまらない、と休憩もそこそこに一服劔を出発。ここからはたびたび鎖場が登場する道。滑落せぬよう慎重に進む。6:45 頃、別山尾根の稜線上に出ると左前方に早月尾根を見渡すことができた。獅子頭など、山頂直下は想像以上に険しく見え、垂直に切れ落ちた小ピークもある。あそこは果たして一般道なのだろうか一同怪訝な様子であった。他方、右手には源次郎尾根を眺めることができ、3年前に源次郎尾根を縦走したことを懐かしく思い出していた。6:55 前劔に到着。

休憩の後、前劔を出発。前劔から劔岳山頂直前の早月尾根分岐点までも断続的に鎖場が現れ、「踏み外せば平蔵谷へ真っ逆さま」との想像が脳裏によぎる。途中、山頂へ至る右手の壁に登攀しているパーティーがいた。落石の多そうなルートだ、とは思ったが人が登っていると自分も手を出してみたくなるものだ。（あとで山頂でそのパーティーにルート名を尋ねたところ、南壁ルートという

らしい。写真とネット上の情報とを照らし合わせると、恐らく A2 稜だろう。) 8:15 頃、東大谷の方から上がってきたガスでブロッケン現象を見ることができた。写真を撮ったが、やはり肉眼で見た光景の方が断然美しい。

8:40、早月尾根分岐。やはり険しい道に思えるが、ガイドに連れられた 15 人ほどの中高年パーティが登ってくるのも目撃した。8:46、山頂到着。4 年生は 2 度目、1・2 年生は初の劔岳である。山頂は登山客で溢れており、祠での写真撮影は順番待ちをせねばならないような有様だった。休憩がてら、八ツ峰を眺めて VI 峰を観察する。休憩を終え、出発前に祠をバックに記念撮影。近くにいた方にシャッターを切っていただいた。

9:15、早月尾根の偵察に出発。予想通り険しい登山道で、分岐からしばらく行ったところで先頭を青木から竹下へ変更し、慎重・確実に尾根を下っていった。前劔から見えた険しい小ピーク群はいずれも池ノ谷側を巻くよう登山道が伸びていた（ペンキマークが明瞭）。稜線から池ノ谷はかなり傾斜が急で、滑落すれば確実に命に関わるといった印象。下りの道は垂壁をクライムダウンするようなことなどなかったものの、気を抜けないトラバースがいくつかあった。ただし、そのような箇所にはもれなく信頼できそうな鎖が整備されていた。また、この頃からガスが多くなり、早月小屋など目視できる目印との距離感がつかめなくなった。10:24、恐らく 2,614m 峰の辺りまで下ったところで劔岳へと引き返した。11:19、青木・竹下が先頭を交代した場所より少し劔岳に近づいたルンゼ状の場所で比較的新しい残置支点を発見した。恐らくここが獅子頭なのだと思う。11:25、分岐点に帰着。

下りの道も上り同様注意して慎重に行く。カニのヨコバイのハシゴは 1 年生の時ほどではないが、高度感を感じて気が引き締まった。前劔着の時間は不明。12:30 頃から雨粒が落ちてくるのをかすかに感じるようになり、雨足が強まったため 12:37 にレインウェアを着用。しかし 13:34 に一服劔に到着した際には雨は殆ど降っていなかった。劔山荘が見え、あとはテン場へ戻るだけだと思った矢先、大粒の雨が降り始めた。慌てて劔山荘へと駆け込み、しばし雨宿り。トイレに行って帰ってきた時には雨足は弱まっており、テン場へ向けて再度出

発。劔沢小屋で天気予報を聞く青木と一旦別れ、他の3人は先にテン場へ。14:45、劔沢CSに帰幕。16:00頃より天気図作成と同時並行で夕飯調理開始。献立は豚汁と白米。青木が天気図を書いていたためいつもより調理の手の数が少なく、おかずより先にご飯が出来上がってしまった。（この後数日間も注意したものやはり同じような結果になってしまった。人手が足りないときはおかず優先にすべしとの教訓を得た。）出来上がった豚汁は、味は申し分ないが1日動いた締めくくりの夕飯としては少し質素だったかもしれない。明日の雪訓の荷支度を済ませ、19:20頃就寝。

#### ■8月20日(月) 晴れときどきガス

行程：劔沢CS～劔沢雪溪～長次郎谷出合～長次郎谷上部（雪訓）～長次郎谷出合～劔沢雪溪～劔沢CS

報告者：古澤

4:00起床。朝食は雑煮。もはや合宿ではお馴染みのメニューである。5:06、予定よりやや遅れてテン場を出発する。今日は雪溪歩き・雪訓があるため少々荷物はあるが、どうということのない重さ。30分少々で雪溪に取り付く。青木・中本は雪溪歩きは初めてなので雪溪の歩き方や注意点を簡単にレクチャーし雪溪を下った。長次郎谷出合までは目立った崩落箇所はなかったが、長次郎谷で2,3箇所大岩が露出しているところでは左岸側にクレバスができていた。右岸側を1人ずつ素早く通過して対処した。とはいえ、谷を詰めるために陸に取り付く必要がないくらいに雪溪はしっかりしていた。8月も下旬に入ったということにありがたいことであった。

8:25、熊ノ岩手前の斜面を雪訓に利用することにして工作開始。幅5mほどのバケツを掘り、滑落用斜面を整備した。ここがこの日一番の重労働だった。「滑

り台」が出来上がってきたところで各自雪訓用の捨て合羽を身にまとい、ピッケルストップの訓練。仰向け・うつ伏せのそれぞれに対して頭が上か下かの2パターン、合計4パターンの体勢で練習した。はじめは頭が下の体勢で落ちるのに面食らっていた青木・中本も、何度か練習する内にコツを掴み4つの体勢でほぼ確実に滑落停止できるようになっていた。9:55、休憩を挟んでコンテ時のコイル突き刺しによる滑落停止の訓練。こちらは訓練用のザイルが30m程度と短めであるのもあってか、手元のコイルが残っている内に突き刺すのに少々苦労した。各自止め役・落ち役を経験し、滑落停止できるようになったところで腰がらみでの確保を練習。ザイルで真下に引っ張られると、本気で足を突っ張らねば体ごと持っていかれる、というのを身をもって理解することができた。

11:50、ガチャなどを片付け、撤収。雪渓は往路のときよりも緩んでおり、アイゼンが効きづらくて歩きづらかった。12:25、長次郎谷出合にて休憩。捨て合羽が暑苦しく、ジャケット(?)部分だけ脱ぐ。竹下はピッケルでズボン部分をわざと切り裂いて下も脱いでいた。13:30頃、取り付き地点に到着。ちょうどこれから真砂沢ロッジに降りるという5人パーティーとすれ違う。ここから劔沢小屋までが雪渓の涼しい(ときに冷たい)風がなくなったからなのか、空腹も相まってやけにしんどく感じた。14:30、劔沢CSに帰幕。

劔沢小屋の天気予報によると明日は昼から雨とのこと。青木の判断により明日は4:00出発に決定。15:50から調理開始。献立はカレーライス。またしてもご飯が先に炊き上がる。ルーを明朝のカレーうどんに流用するために多めに作ったことが影響したのかもしれない。明日、昼以降も晴れることを祈りつつ19:17就寝。

■8月21日(火) 晴れ

行程：劔沢 CS～劔沢雪渓～長次郎谷～八ツ峰VI峰 C フェース 剣稜会ルート～長次郎谷～劔沢雪渓～劔沢 CS

報告者：古澤

3:00 起床。朝食は昨夜のカレールーを流用したカレーうどん。味も量も申し分なかった。4:05 出発。あたりはまだ暗くヘッドライトを装着して進んだ。4:32、雪渓への取り付き地点。アイゼンを装着する頃にはライトが必要ない程度には明るくなっていた。5:05、長次郎谷出合。途中休憩を挟みながら昨日と同様に谷を詰め、6:00 頃 V・VI のコル手前の陸地に登攀に不要なアイゼン・ピッケルをデポした。途中、昨日出会った 5 人パーティーと再び出会う。デポ地点からは陸伝いに VI 峰へアプローチ。八ツ峰へ接近するにつれて踏み跡もガレてきて、落石を起こさぬよう歩くのに注意を要した。7:00 過ぎに C フェースの取り付きへ到着。登攀の準備をしていると、先ほどの 5 人パーティーも取り付き地点へとやってきた。どうやら彼らも C フェースを登るらしく、内心「順番待ちになったりしたらいやだなあ」などと考えていた。

7:25、登攀開始。ザイルパーティーは竹下-中本、古澤-青木で、C フェースに 2 度登ったことのある竹下が先行した。竹下がスムーズに登り、ピッチを切って中本がある程度登ったところで古澤組もスタート。その後もほぼ付かず離れずのペースで 2 組とも登っていった。1P はバンド状の平凡なピッチ。落ちることはまずないだろうが、古澤はルート取りを間違えたらしくヌンチャクを 1 個しかかけられなかった。売るほど残置支点があるとは聞いていたが、ルート取りを間違えては元も子もない。小ルンゼの手前のテラスでピッチを切る。2P は青木がトップのつるべ方式で登った。以降のピッチも同様。竹下組は竹下が常にトップで登っていた。2P は小ルンゼを登り切った灌木に支点をとって切っていたが、やや足場が悪い。後続の 5 人パーティは小ルンゼを左に少し離れたテラスで 1P を切っていたので、そちらの方がよい切り方だったのかもしれない。3P は大きく段状になったハイマツ混じりの岩場を登る。登り切るとナイフリッジまで見通せる横長の広いテラスに出た。竹下組はその後のフェイスを少し登っ

たところでピッチを切っていたが、支点があまり良くないらしい。テラス左方に真新しいボルトとハンガーがあったため、少し短いはこちらはここでピッチを切った。4Pはナイフリッジへと続くフェイス。高度感を楽しむ余裕もあり、源次郎尾根から槍ヶ岳まで見通せる素晴らしい展望を堪能しながら登る。途中でピッチを切り、そのまま左上してハイマツの生えたテラスで5Pを終えた。6PはいよいよCフェースの頭への稜線をたどる核心のナイフリッジ。外れかけの大きな浮石に気をつけつつ、楽しんで登る。ナイフリッジ近辺では足元にバランス感覚を要するトラバースがあったものの、楽しんで登れる程度の難易度。頭の直下でピッチを切り、Cフェースの頭へ。10:20、Cフェースの頭に到着。合計7Pの行程であったが、1P~5Pで上手くピッチを切ればガイド本通り5Pで行けるルートだと思う。

Cフェースの頭でのんびりして登攀の充実感を噛み締めた後、下降を開始。踏み跡を辿ってクライムダウンなどしながら進むが、ハイマツに括りつけられた残置スリングで20mほどの懸垂下降をした後踏み跡を見失った。三ノ窓側に伸びるルンゼを途中まで下降してみたものの、草が生い茂るばかりで踏み跡らしきものはない。困り果てて仕方がないから剣稜会ルートで懸垂下降しよう、とCフェースの頭まで登り返したところで先ほどの5人パーティと三度出会う。あとで話を伺ったところ、月曜山歩会という山岳会に所属するパーティーとのこと。下降点が見つからなくて登り返してきた旨を伝えると、一緒に下降点まで行こうか、との嬉しいご提案を頂いた。月曜山歩会の皆様のご厚意に甘えさせて頂くことにして、先ほど踏み跡を見失った場所まで再び下った。4人+5人と、にわかに大所帯となった。月曜山歩会の方に先導していただいたところ、先ほど踏み跡を見失った場所の長次郎谷側のハイマツの中に残置スリングを発見した。そこから2,3回懸垂下降をするとV・VIの科尔へと下降できた。最後の下降は非常にザイルが流れにくく、回収になかなか手間がかかった。

月曜山歩会の方々と別れ、私たちはアイゼン・ピッケルの残置場所へ。V・VIの科尔はだいぶガレていたが、人と人の間隔が広く空いていたため、少々の落石は気に留めず、強引に降りた。正直な話、疲れていて早いところテントへ



帰りたかった。15:50、残置場所に到着。Cフェースは登りより下りに大きく時間を取られてしまったことになる。16:30、長次郎谷出合を経て17:18に雪溪の取り付き場所に到着。途中、下山後の話などに花が咲く。18:03、劔沢小屋に到着。青木が天気予報を聞いている間3人は外で待つ。戻ってきた青木によると、実は、今まで聞いていた天気予報は立山町の天気予報で劔岳周辺の天気予報ではなかったとのこと。今日まったく雨が降らなかったのもそういうことか、と肩透かしを食らった気分。18:25にテン場に到着。荷物をおいて一息ついた後、シチューの調理を開始した。今回はルーを竹下にも振る舞い、テント内で4人での食事。21:00就寝。思いがけず長い行動時間となったためすぐに入眠できた。

最後になったが、下降の際助けていただいた月曜山歩会の5人の皆さんに改めて感謝を申し上げたい。見ず知らずの私達を助けていただき、本当にありがとうございました。

## 22日 八ツ峰VI峰Aフェース魚津高ルート登攀

竹下

- 4:00 出発
- 5:05 長次郎出合
- 6:25 アイゼン残置
- 7:00 Aフェース下部
- 9:20 Aフェース頭
- 11:05 5、6のコル
- 11:25 アイゼン残置場
- 12:20 長次郎出合
- 13:15 雪溪からあがる
- 14:20 テン場着

4時出発のために、1時間前の3時起床。3時起床と言っても8～9時間の睡眠

をとれるような就寝時間で動いているため、目覚めは非常に良い。2人用テントに1人で広々と寝ているせいもあるかもしれないが。出発した4時ではまだ辺りは暗く、剣山荘からの登りにはヘッドライトの列が見えた。雪溪に取り付くまでの道にも、雪溪上にも先行パーティーの姿は見えなかった。お盆を過ぎた頃だからか、昨日のCフェースもそうだったが登攀をするようなパーティーの姿を今年はほとんど見かけていない。予定通り7時にAフェースの取り付きに到着。雪溪に取り付いてから少し時間がかかった昨日から学習し、今日は壁に近い地点で陸地に取り付いたのが功を奏したのだろう。CフェースとDフェースにはいつの間にか他のパーティーの姿が見えた。魚津高ルート取り付き地点から上を見上げ、どのようなルート取りになるか考える。日陰になっているため、じっとしていると非常に寒い。本や登攀記録に書かれている核心のハングというのははっきりと確認できなかった。昨日のCフェースは私(竹下)ー中本パーティーが先行したため、今日は古澤ー青木パーティーに先行を進める。登攀を楽しんでもらいたいというのと、様子を見たいという気持ちの半々だった。7時半頃古澤パーティーが登攀を開始する。1ピン目までの距離が長い。落ちたら地面だな…など見守っているうちに、高度を稼いでいく。10mほど登った所から岩が被って狭くなってきているところを右上に抜けていく。かなりいやらしそうで、古澤も若干苦勞している。右や左に抜けられない様子を見ると噂の核心のハングではなさそうだ。が、その箇所を抜け姿が見えなくなるとスムーズにザイルが流れていった。しばらくするとビレイ解除の音が響いた。無事核心の1ピッチを抜けたようだ。青木がその後を続いて登っていく。落ちたら地面だと言っていた1ピン目の少し下にもう1ピンあるのを青木と中本が教えてくれた。青木に次いで私(竹下)ー中本のパーティーが登攀を開始した。下部は問題なかったが、例の岩が被ってくる部分で非常に苦勞した。はっきりとしたホールドがない上に、微妙なバランスを要求された。また足元はビレイヤーまですっぱりと切れているため高度感もたまらない。ハーケンはたくさん打たれているがそれもどの程度効いているかだんだん怪しくなってくる。一手一手慎重に登り、核心(であったのだろう)を抜けたころには手元のガチャがほとんどなくなっていた。結局そこからは1ピンほどの距離しかなかったため、問題はなかったが今後はリードのガチャの状態にも気を付けなければなどと考えて1ピッチ目終了点にいる青木の元へ上がった。2ピッチ目は支点すぐ上の細いルンゼをしっかりとしたホールドを頼りに快適に登れた。あまりに快適過ぎてほ

とんど記憶がないくらいだ。垂直なフェイスの陰でピッチを切り、最後のピッチにかかる。事前調べによると3ピッチ目はⅡ級程度とのこと。一度中本にリードをしないかと勧めるも渋られるため、1ピッチ目はⅣ級、2ピッチ目はⅢ級、次はⅡ級しかないぞと話をするので了承。彼の人生初のマルチのリードとなった。落ちても止めてやるよと送り出し、しばらくするとビレイ解除の声が聞こえた。3ピッチ目はやはり記録の通り、何の変哲もない、フリーでも問題の無さそうなピッチだった。2, 3ピッチ目はそれぞれ40mとの記載がルート集にあったが、その半分程度ぐらいの距離にしか感じなかった。Aフェイスの頭では先行パーティーの古澤と青木が下降点を見付けていた。2日間の登攀を終えた安堵のようなものが全員の顔に見られた。下降点からは50mの懸垂下降2回でV・VIのコルへと降りられた。おそらく1回目の懸垂下降は25mでも足りただろう。連続して下降した際にザイルが絡まらないように今後はトレーニングする必要がある。V・VIのコルからは慣れた下り。テン場へはあっという間に帰ってしまった。テン場に着くと4人で梅酒とつまみのミニ打ち上げのようなものを行った。私が1年だった時の定着合宿に比べて今回の定着は非常に短く感じた。山に慣れたのだろうか。夕方からは夕食の準備を始めた。持参しているα米とお湯を入れるだけのチキンカレーが非常に美味かった。夕食時(といっても16時頃)からテン場に入ってくるパーティーが増え始めた。しかも、大学生や20代の男女の複数人のパーティーが多かった。これからが第二のシーズンなのであろうか。大声で歌を歌っている女性もいた。雷鳥沢だけでなく、剣沢まで下界に近づきつつあるのかもしれない。静けさを求めるなら真砂沢テン場まで下りなければならないのだろうか。翌日は雷鳥沢まで下山するだけなので朝もゆっくりだが、山時間で動いている体はいつものように早くに寝てしまった。

8月23日 雷鳥沢へ下山、荷物送り返し、食料補給

竹下

6:03 出発

6:48 劔御前小舎

8 : 07 雷鳥沢テン場  
9 : 00 雷鳥沢発  
9 : 45 室堂  
11 : 40 室堂発  
13 : 00 雷鳥沢テン場  
15 : 35 中本帰還

テント撤収があるため、出発時間の1時間半前に起床する。普段は1時間前だが、ソロテントということもあってのことだったが、3人用テントの彼らも同じように起きていたようだ。こういった教わらない工夫が出来るようになってくれると嬉しい。私は本を読みながら朝食を済ませ、テント撤収をした。6時出発。テン場にいた多くのパーティーが同様に撤収を始めていた。劔御前まで本日最初で最後の登り。小屋の前でしばらく休み、雷鳥沢へ下る。20人以上のパーティーをガイドが1人か2人で連れていた。下りの途中左ひざに奇妙なじーんとする痛みを感じるも、出たり消えたりするので放置した。昼前に雷鳥沢のテン場に到着。すぐに室堂へ荷物の送り返しに向かう。地獄谷は相変わらずガスで通行止めだった。室堂では下山連絡を済ませ、各自実家などに下山の連絡を入れた。室堂のバスターミナルには観光客が多かった。海外からの団体客もいるようだった。10時40分のバスで古澤と買い出しの中本を送り出し、青木と私(竹下)2人でぶらぶらした。後半の縦走合宿で踏ん張れるようにと、肉巻きおにぎりを食べ、コーラを飲んだ。みくりが池温泉では昼食と言いつつ、ピザを食べビールを飲んだ。中本が戻るまでは大分時間があつたため、テン場に戻り本を読んだり、ぼーっとしたりして過ごした。なかなか中本が戻ってこず、楽しみにしていた追加の嗜好品にもありつけそうになかったため定着の予備食の棒ラーメンを2食分食べた。青木はエッセンで腹が膨れているらしく、竹下特製久留米ラーメンを食べなかった。中本が戻ってきて嗜好品のお披露目がある。私には板チョコをくれた。青木と中本は夕食の準備を始めたが、私はラーメンのために腹が膨れていたため、夕食はパス。寒くなってきたためテントにもぐりこんだ。遠くで雷がゴロゴロ鳴っていた。雨が降らなければいいなと思いつつ就寝。

8月24日 雷鳥沢～五色ヶ原～スゴ乗越小屋

竹下

- 6:00 出発
- 8:32 鬼岳東面
- 9:15 獅子岳
- 9:58 ザラ峠
- 10:36 五色ヶ原山荘
- 11:14 鳶山
- 12:42 越中沢岳
- 14:05 スゴノ頭
- 14:30 スゴノ越
- 15:20 スゴノ越小屋

縦走1日目。雷鳥沢から一ノ越のスカイラインを目指す。既に先行者が数名いた。装備から雄山にでも登るのだろう。川沿いを進むも、川に阻まれ無理やり川を渡った。進み道から右手側のおそらく室堂から通じる登山道にも数十名の団体客がいた。同じジャージを来ている様子から学校の遠足か何かだろう。一ノ越からは遠く小さな槍ヶ岳が見えた。富士山の頭も見えた。先ほどの団体客が来て騒がしくなってきたため出発。途端に静かになったが、それでも時折、登山者とすれ違う。龍王岳付近で、私(竹下)が一年の頃は元気が有り余って先輩を待たせて龍王岳に登ったもんだよという話をするも、今のクールな若い後輩たちにはなんの影響も与えなかったようだった。雷鳥が情けなく「あ〜…」とそれこそ人のため息のような声で鳴いていた。10時過ぎに五色ヶ原テン場と小屋との分岐に到着。予想通り、早すぎる到着だったため、これまた予定通り、予定を変更してスゴ乗越小屋へ向かうことにした。越中沢岳への登りは快適だったが、下りがなかなか険しかった。コースタイムも若干長めに設定してあるようだ。越中沢岳からスゴ乗越までは距離はそれほどないがアップダウンが続く。ややガスってもきていたため、延々と登り下りしているような気持ち

にさせられる。途中すれ違った登山者から、我々と同じで上高地まで縦走予定の外国人女性が一人いるという話を聞く。スゴ乗越テン場の直前でそれらしい女性を追い抜いた。スゴ乗越テン場到着は15時過ぎ。お菓子と小屋で買ったCCレモンで乾杯した。レモンが体に染みた。すぐに夕食の準備に取り掛かる。流石にお湯で作るインスタントにも飽きてきていたため、今日は2人が作るハヤシライスを御馳走して貰うことにした。夕方から遠くの方で雷が鳴っていた。雨が降らないといいが…とテントの中で心配した。ふとした時に自分の臭いに気付かされる。今回は中本以外の私(竹下)と青木はみくりが池温泉に入っていない。また今日1日の歩きで肩が凝り、体中がギシギシいっている。おかげでか、そのせいか夜はぐっすり寝られた。

#### 8月25日(スゴノ越テン場～薬師峠テン場)

青木

06:05 スゴノ越テン場発  
07:04 間山  
08:30 北薬師岳  
09:40 薬師岳  
10:24 薬師岳山荘  
10:58 薬師平  
11:20 薬師峠テン場

朝食は雑煮。お吸い物に餅が入っているものなのだが、量が少なかったため腹が減る。休憩のたんびにエッセンがドンドン進む。

少し歩いていくと、北薬師岳が見えた。だがまだ薬師岳はみえない。間山の山頂にはかなりの人がおり、何度かきている人が「間山にこんなに人がいるのは初めて見た。」と言っていた。確かに立て札もない寂しい山頂だった。

薬師までの道のりは周りが開けた登山道で風も良く通り涼しかった。天気もいつも通りよく気持ちがいい。途中の2832mのピークからは大きな湖が見えた。

地図によると有峰湖という湖らしい。地図上でもかなり大きい。

薬師岳山頂にはお堂があり、ガラス越しには地藏さんや仏像やキューピー人形がおいてあった。なぜにキューピー人形がおいてあるのかはわからなかった。山頂であったおじさん（後々何度か会うことになる I 氏）からは中学生に間違われた。まだまだ若い証拠だ。

薬師岳から薬師岳山荘への道はずっとザレ場だった。そこをジグザグに進む。薬師岳山荘は新しかった。社会人になったらここに泊まりたいものです。

薬師平は木道になっており、歩きやすい。地図にもあったとおり、巨大のケルンもあった。その後樹林帯を抜け、テン場へ。

テン場に着くと管理所はしまっていた。どうやら 14:45 分頃に太郎平小屋から人間が来る予定のようだ。トイレに行ってみると新しくできたようで、綺麗だった。

テントをたてたあと、ジュースを買いに太郎平小屋まで歩く。その日、太郎平小屋は大盛況だったようで、二畳に 3 人が寝ている状況だったとのこと。買った直後、くつろいでいると雲行きが怪しくなってきたので、テン場に帰ることに。

テン場に戻り、夕食の支度をしていると室堂～上高地まで歩く予定だと言う、アメリカ人の K さんにあった。女性一人単独で歩いているようだ。その女性と薬師岳でお会いした I 氏と少しお話した。I 氏もどうやら上高地まで歩くつもりようだ。社会人と外国人、時間は限られているだろうによくやるなあと思った。明日は 4:00 発だったので、早めにねる。

## 8月26日（薬師峠テン場～双六テン場）

青木

- 04:00 薬師峠テン場
- 04:20 太郎平小屋
- 05:45 北ノ俣岳
- 06:27 赤木岳
- 08:26 黒部五郎出会

08：36 黒部五郎山頂  
10：15 黒部五郎小舎  
11：50 三俣蓮華岳と三俣山荘の別れ  
12：25 三俣蓮華岳  
14：05 双六小屋

太郎平小屋付近は木道があり、歩きやすい。早朝にでていたため、道を間違えてしまうのではないかと、不安になっていたのも、有り難かった。

北ノ俣岳に近づいてくると日が登ってきた。天気もよかったため、遠くの檜が見えた。

黒部五郎出会に近づくと黒部五郎岳ピストンのため空荷で登っている人が見えた。後一息だと気合いを入れて登った。出会で荷物をおき、山頂を目指す。黒部五郎の「五郎」は人の名前ではなく、岩がゴロゴロしているという意味らしい。山頂からは稜線コースとカールコースが見え、小屋も見える。1年前の夏合宿で撤退を決定した因縁の場所だ。

山頂から小屋へ向かっている途中で私（青木）の耳が異常なことになっていることが発覚。どうやら真っ黒になり少し化膿しているらしい。どうすることもできないので、小屋を目指し下っていく。

小屋に着くと、私はかなりなつかしい気持ちになった。1年前に飲んだホットカルピス、使用したトイレもそのままだった。やっとここまで戻ってきたという気持ちだった。

黒部小屋からの登りは木々に囲まれた湿気た場所を歩く。虫がぶんぶん飛び、我々に近寄ってくる。しかも急登。きつい。途中にところどころ「急坂コース」「ゆっくりのんびりコース」に別れた分岐があり、各々好きなコースから登り、競争した。各人の登るスピードに違いはあるかもしれないが、どうやら「急坂コース」のほうが早いようだ。

登りを終え、後は稜線伝いにだらだら登るだけだと思いきや、三俣蓮華岳への道のりは中々きつかった。長時間歩いていたこともあり、疲労がどっと押し寄せてくる。

三俣蓮華岳からは巻道コースで双六小屋を目指すことにした。そのときは最短で楽だと思い、そのコースを選択したのだが、4年の先輩が言うには、中道ルートのほうが楽に感じたとのこと。来年通ることがあれば、中道を選ぼう。



双六小屋に着いた。早朝にでたこともあり、思ったよりは早い時間に着いた。テン場には高校生の団体がテントを張っていた。明日槍ヶ岳を目指すらしい。双六小屋でおでんを注文し、3人で食べた。うまい。

夜テントに入って、眠りにつこうとすると、隣の女子高生の話が聞こえてくる。アイドルの嵐の話をしていた。やはり女子高生はジャニーズの話が好きなのだ。そのせいでなかなか眠れなかった。

## 8月27日

中本

4:30 起床  
6:00 双六小屋発  
6:25 縦沢岳  
9:20 槍ヶ岳山荘  
9:50 槍ヶ岳山頂  
10:55 大喰岳  
11:20 中岳  
13:20 南岳  
13:25 南岳CS

前日の長時間の山行の割には、それほど疲労感はなくすっきりとした目覚めだった。近くに中学生のグループがおり、青木先輩が昨夜は会話がうるさかったと言っていた。縦沢岳までの軽い登りの後は、千丈沢乗越まで起伏の少ない歩きやすい道だった。この辺りからは槍ヶ岳がよく見え、剣岳から見たときと比べ随分と近づいてきたものだなと感じた。途中、メリハリをつけて歩くようにと竹下先輩を先頭にして歩くところもあった。山荘までの登りはだらだらといやらしい道が続き、まだかまだか考えているうちに到着した。荷物は山荘に置いて、軽い休憩の後に槍ヶ岳ピストン。頂上にはあまり人はいなく写真撮影をしてすぐに降りた。前日の打ち合わせの通り、計画では2日に分けて行うはずだった山行を1日で済ます予定だったので、山荘からは南岳に向かった。地図

では中岳～南岳に水場があるとのことだったが水量が少なかったため断念。南岳小屋で買うことにした。これまた起伏の少ない道をすいすいと進み、あっという間に南岳小屋に到着した。非常に天気がよく洗濯物日和だったため、朝露で濡れたテントやシュラフ、靴下などを早々と干して、小屋でジュース（残念ながらコカ・コーラはなかった）を飲みながら3人で竹下先輩の牛丼を囲んだ。久々の肉は旨かった。その後は各自でゆっくりと過ごした。私は一人で大キレットを見に行ったが、あまりの迫力に明日が不安になった。夕食を済ますと3人で2時間ほど会話をして就寝した。

## 8月28日

中本

- 4:30 起床
- 6:00 南岳小屋発
- 9:15 北穂高小屋
- 11:20 涸沢岳
- 11:45 穂高岳山荘

いよいよ大キレットを通ることになり気合を入れて出発した。大キレットに入り20分ほどで、青木先輩のプラティパスに穴が開くというトラブルに見舞われたが、冷静に対処して事なきを得た。集中力を持続させるため休憩をあまりとらずに歩を進めた。1番の山場である飛騨泣きは切り立っておりスリルがあったが、足場やホールドはかなりしっかりしていた。慎重に進んで無事に北穂高小屋に着いた。少しの休憩をはさんで涸沢岳に向かう。北穂高～涸沢のルートもかなり危険な登り降りが続く、気が抜けなかった。大キレットを抜けたからと気を抜くのはまだまだ早いと感じた。途中で外国人の若いカップルとすれ違ったが女性はサンダル、男性もスニーカーという軽装備には驚いた。無事に穂高岳山荘に着くと荷物を降ろしてそれぞれジュースを買い、本日は竹下先輩のスパゲッティを3人で食べた。これまた魚介類が旨かった。テントを張ることになったが、青木先輩と私のテントが入りそうな場所がなくヘリポートに幕営

した。ヘリが来れば撤収する必要があるとのことだったが、幸運にもそれはなかった。昼食に棒ラーメンを食べ竹下先輩と私は平たいヘリポートの上で昼寝をした。日差しが強くなるまではかなり気持ちよく眠れた。

8月29日

中本

3:30 起床

5:00 穂高岳山荘発

5:25 奥穂高岳

7:05 前穂高岳

10:20 上高地

本日はいよいよ下山。出発までの準備もだいぶ手際が良くなっていた。朝焼けが非常に美しく、小屋の前からの景色を多くの人がカメラを片手に見ていた。まだ肌寒い中、はしご、鎖を慎重につたって奥穂高に到着。簡単に写真撮影を済ますと平たんな道の吊り尾根を通過して紀美子平まで行く。ザックを降ろし少しの休憩をはさんで前穂高ピストン。天気にも恵まれ山頂からは槍ヶ岳が見えた。残りは上高地までひたすら山を下る。岳沢ヒュッテまでの重太郎新道はだらだらと長い道が続きは非常に長く感じたが、ヒュッテで「上高地まであと1.5時間」の看板を見つけると自然と歩が進み、小走りのようなスピードで一気に下った。森を抜け河童橋を渡って終了。3人で合宿の成功させた喜びを分かち合った。余韻も冷めやらぬまま、ジュースを飲んで各自でお土産を買って、バスターミナルへ移動し新島々へ、そこから電車で松本駅まで行った。駅にザックを降ろすと駅近くの温泉に入り、もはや定番となっているらしい食堂で久々にまともな食事を取った。電車を乗り継いで松本から姫路まで行けた。午前1時ごろについたが始発まで3時間ほどしかなかったので駅周辺でビバークすることにした。

8月30日

中本

4:30 姫路発

16:00 博多着

朝食を青木先輩と駅近くの定食屋で牛丼を食べた。そういえば入山前にも、富山駅で牛丼を食べたなど遠い昔のような出来事を思い出した。適当に食料を買い込み、始発の電車に乗り込む。特に大きなトラブルもなく無事に博多についた。

#### 交通

青木

今回の合宿はおおむね予定通りに進んだ。しかし、今回は博多から京都までは18切符、京都から富山までバスで行ったのだが、これは逆にしたほうがいいかもしれない。もし、電車が遅れた場合夜行バスに乗れなくなってしまうからだ。夜行バスが遅れても、電車は何本も出ているので、大丈夫だ。

#### 天気

青木

今回の合宿では本来のサイズより小さめの天気図を一部もってきてしまった。結局、それは一回しか使わなかったが、ちゃんと確認して合宿にもってくるべきであった。

#### 食料

中本

計画段階から古澤先輩、宮本先輩には非常にお世話になったことを、まずはここでお礼を言いたい。私が見積もっていたよりも、実際に必要な食事やエッセンの量が多かったのが計画の段階で気が付いてよかった。山でも古澤先輩にはいろいろと教えていただいた。縦走ではそのことを上手く活用できたと思う。失敗した点は、①キムチ雑炊をする予定が鍋の出汁が余らずに出来なかった②人参を一本腐らせてしまった③28日の朝食が不味かったの3点である。①については余った卵スープを使い、一食分の食料として対応した。②は雪渓に野菜は埋めるなどして対処すべきであった。今後は気を付けたい。③は水が少なかったことに起因するもので量を把握していなかった私のミスである。認識が甘く、朝からモチベーションが下がることをしてしまった点については今後の改善点としたい。上記を除けばその他の食事は、なかなか良くできた。腐りにくいからと肉の代用品としてウインナーにしたことは良かったと思う。エッセンに甘納豆を取り入れたことも良かった。今後の課題としてはより素早く食事を提供できるようにすると共に、バラエティに富んだ献立を考えたい。

#### 青木（感想と反省）

今回は何より合宿の日程を全て完遂できてよかった。登攀、縦走ともに完璧な天候であった。去年、途中で山を下りてきてしまったため、感慨深かった。去年通ったルートも天候がよかったため、違う道のように見え、景色も全然ちがうものだった。来年も今年のようになってもらいたものだ。

今合宿では登攀も行え、八ツ峰も登れた。比叡のときは簡単に取り付きに着け、簡単に下山できたので、そういうものだ勘違いしていたが、実際の剣ではアプローチ、下降とともに難しかった。やはり山岳地帯でのロッククライミングは大変だ。どうとりつくのか、どこから下降するのかなどみきわめをこれからの活動で養っていきたい。

縦走は前回の合宿と比べ、景色がよく見え、縦走の楽しさというものがわかっ

た気がした。槍もどんな位置からでも見えた。きつかったが、今回の合宿はきついただけではなかった。1年生の中本君もなかなか楽しめたのではないだろうか。来年は全員参加で夏合宿に行けることを願いたい。

#### 中本（感想と反省）

まずは合宿が無事に終わったことにホッとしている。天候にも恵まれ計画通りの活動が出来たことは幸運だった。私は、初めての長期合宿ということもあり不安と期待が入り混じった状態で参加した。今回の合宿を通して、生活面から技術面に至るまで3人の先輩には根気強く指導して頂いたことには感謝している。私の至らなさから、チームの足を引っ張ってしまった事例は枚挙にいとまがないが、その都度先輩方には助けていただいた。しかし、私としても剣岳やCフェース、Aフェース、後半の縦走を通して大きな経験が得られたものと確信している。これは今後の活動に繋げていける大きな糧となった。またCフェース、Aフェースを登りきったときの爽快感や、名だたる山々の頂にたどり着いた時の何とも言えない高揚感を感じた時は来てよかった、やってよかったとしみじみと感じたものであった。今後の課題としては、更に登攀技術を向上させると共に、歩荷訓練を重ねてバテない体作りに努めたい。次回からは他のメンバーを牽引できる様な存在になれたらと思う。今回の合宿に於いて準備に携わってくれた部員、そして合宿でお世話になった竹下、古澤、青木先輩に今一度お礼を申し上げたいと思う。ありがとうございました。